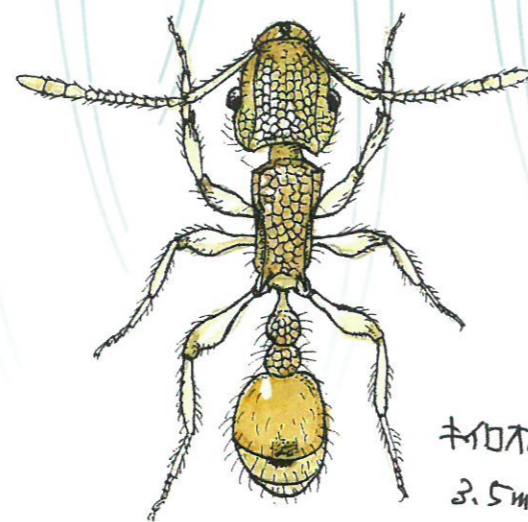
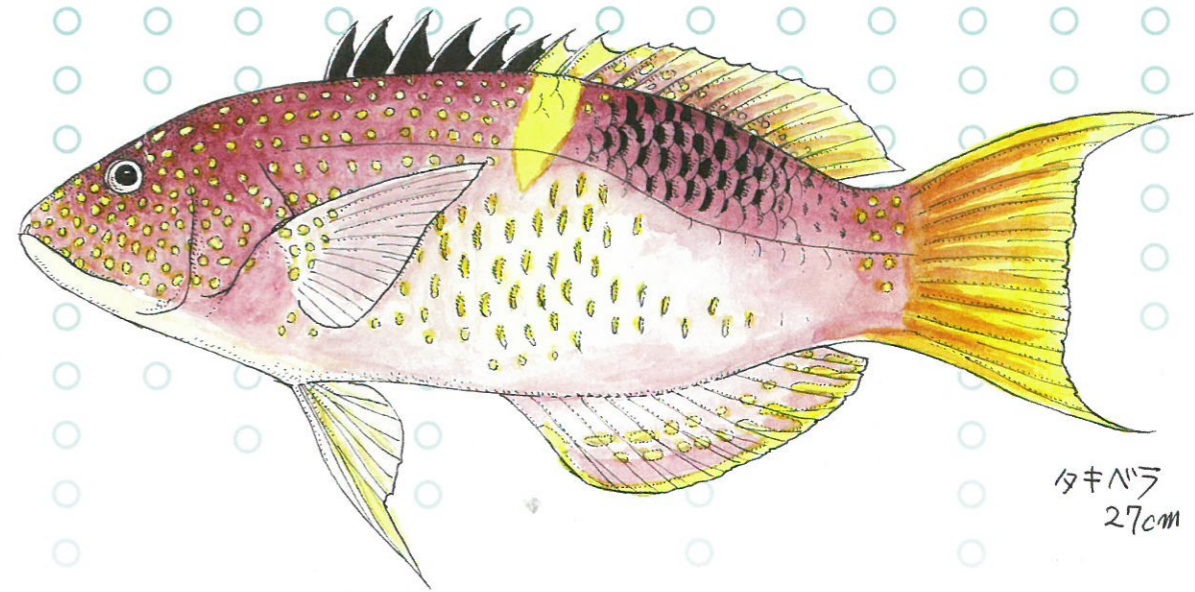
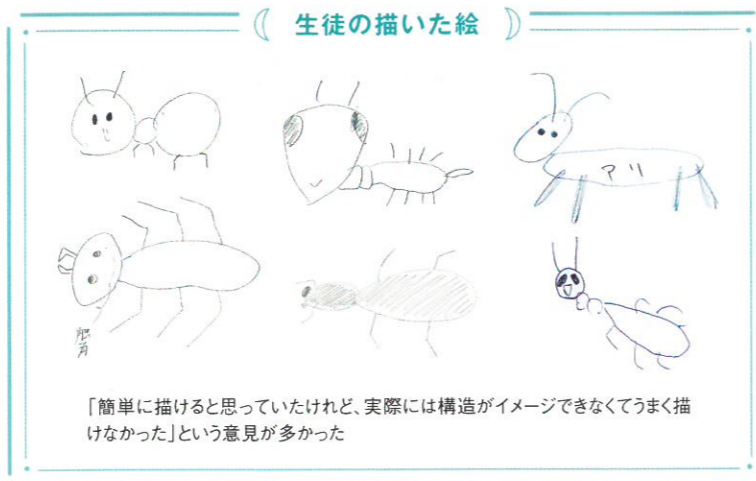


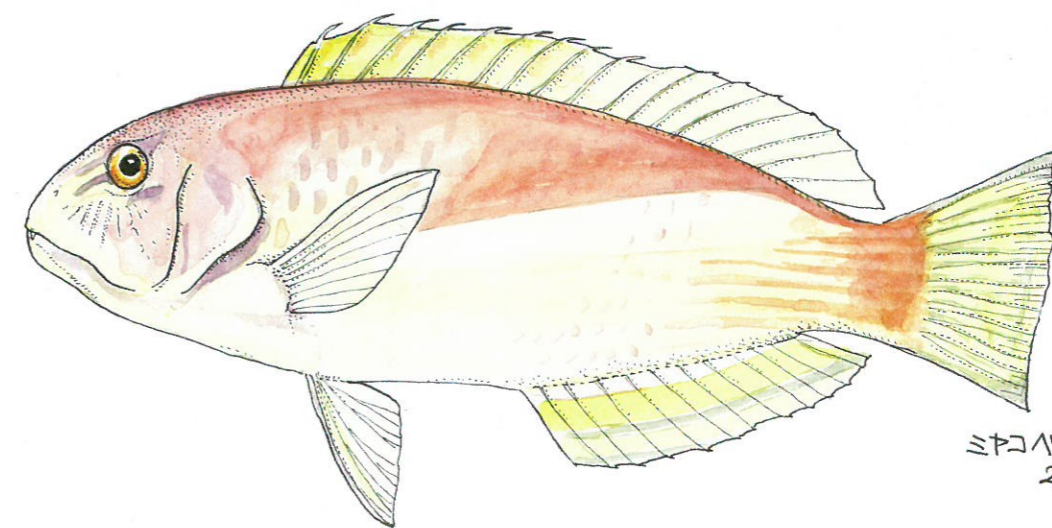
アオアリ (体長5mm)



キロアオアリ
3.5mm



タキバラ
27cm



ミヤコバラ
22cm

生き物の絵を描く

見ているはずなのに描けない……。
あなたは身近にいるアリや魚の絵を描けますか？

に、見たことがあるはずのアリは描けない。これは、見ているけど理解していない。つまり、理学的な見方が定着していないわけです。虫のからだを教わったことがあるはずなのに、今の理科教育は子供たちの生活から離れたところで教科書だけでやっているのだから、身に染み付いていないんだと思うことがあります。

生き物に関心がない？

私は千葉県の海辺で育ったので、いろいろな貝殻を拾って、それぞれ違いがあることを楽しんでいました。その次に、名前を知りたくなって図鑑を買って名前を調べて、そういうところから生き物とのつながりが始まったんです。その後、大学で生物学を学んで、いろんなきっかけがあった教員という道を選びました。教員になったことで、生き物の絵を描くことに自然と関わることになりました。

今は、沖縄大学で小学校の教員養成課程を担当しています。が、学生にアリを描いてもらうと左上の図のようにになります。面白いことに、今度は河童を描いてもらうと描ける。見たことがない生き物は描けるの

私の住む、那覇の小中学生に普段見ている生き物を聞くと、イヌ、ネコ、ハト、ゴキブリ、草でした。これは街中に自然が少ないということだけじゃなくて、都市的な生活だと生き物を気にしなくてもいいようになってるんだらう。だから、アリを描けって言われても、気にしてないから描けない。でもそれで別に困らないって生活をしているのかなと思います。

学生に絵を描いてもらうのも、自分の自然認識を診断してほしい、自分がどこにいるか気付いてほしいと思ってるからです。私自身も絵を描くときはしつかり見ます。その体験はいつまでたっても、いくつ絵を描いても、いつも新鮮です。自分が自然を見て

かるし、自然をきちんと見るとするために絵を描いてるといふこともあります。

絵は残すために描くという面もあります。描くことで自分の頭の中に記憶される。知らなかったものは、ちよつと知ったようなものとして残される。もう一つは、自然物っていろいろ多様なことがあるので、1回限りの現象やなかなかない現象を記録します。

それから、伝えるために描く。文章だけより見てもらいやすいし、写真よりも伝え手が何を伝えたいかというのをはっきり形に出ます。こうして見ると、知るため、記録するため、伝えるために絵を描くってことをやってきたんだと思います。

もっと自然を楽しむには

身近な自然というものが分りにくくなっている中で、誰でも触れ合える自然物を探しに行かなきゃいけないと思っっています。それで食べ物や生き物として描けないかと考えました。例えば、果物、ご飯などの穀物、食べた後に残る骨。サンマを食べたときにこの骨を見るとこんなことが分かるよとか、フライドチキンの骨は鶏のこの部分であるよとか。理学的な知識も含

めて、ちよつと見方が変わるきっかけになるように、食べ物や生き物の絵を描くということもやってきました。

絵を描くときに本物みたいに描けないと尻込みする人が多いんですけど、本物にならない、嘘なんだと割り切ったどの程度の嘘にするかを決めとけばいいんです。リアルに描き過ぎることに縛られない。例えば、時間がなくて大変だというなら線画にする、輪郭だけ描くと決めればいい。それがその人の絵の特徴にもなります。私も一つ一つにそこまで時間をかけられないけど、例えば拾ったどんぐりが一個一個全部違うことを書き表してみよう。たくさん描いて総量で何かを見せる。これが自分のできるリアルな追求かなと思っただけです。



盛口 満さん
(もりぐちみつる)

通称ゲッチョ先生。1962年千葉県生まれ。千葉大学理学部卒業。85年学校法人自由の森学園理数科教諭。2000年に沖縄へ移住。NPO法人珊瑚舎スコレ講師、沖縄大学人文学部教授を経て、19年沖縄大学学長に就任。専門分野は理科教育。現在は同大学で初等理科教育法の科目を担当。著書に「めんそーれ！化学」「天空のアリ植物」「ひろった・あつめた」のマツボックリ図鑑」など多数。新刊に「ものが語る教室」。

イラスト=盛口満